

女子校LIFE

HonoRin

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女子校に通っているユキのSchool Lifeのお話。

女子校特徴の楽しみ、悲しみ、恋…。

ユキは、この「女子校」という未知の世界で生活をしていく。

主な登場人物

・ユキ…高校に入る前まではずっと共学の学校に行っていたが、高校生になって初めて女子校に入り、未知の世界を体験していく女子高生。

・リュウヤ…ユキと両思いだが、ユキ自身はその事に気づいていない。ユキの中学校時代の部活の一つ年上の先輩。男子です。

・カオル…ユキと同じ女子校に通う、女子高生。ユキと仲が良い。よくユキに相談をしに来る。

・コウキ…カオルの事が好きな隣の共学高校に通う男子高生。ヒロヤのライバルだということとは気づいていない。

・ヒロヤ…カオルの事が好きな、カオルの中学校時代の友人。男子高生。コウキのライバルだということとは気づいていない。

前作「卒業く別れ」の続編です！

目次

START	1
オリエンテーション合宿	5
カオル	9
部活の話	15
お誘い	19
おじやまします	23
勉強会	27
恋のお悩み相談	31

START

4月8日。高校入学式。今日、私：ユキの高校生活が始まった。私にとっては、ここはとても新鮮な場所だ。なぜなら、そこは「女子校」だからだ。

今まで私は共学の保育園、小学校、中学校生活を送ってきたものだから、男子がいないこの女子校はものすごく新鮮だ。

クラスが発表され、私はその教室へと向かう。

教室に着き、ドアを開ける。挨拶などは全くせず、無言で教室に入り、自分の席に座った。

周りの人は、もちろんのこと、全員女子だ。それもあって、聞き慣れない甲高い声が教室中を包み込んでいる。

私は元々声が低く、髪も短い、男子に見間違われてもあまりおかしくない容姿だ。だから、周りの声の高さは私にとって、少しうるさいと思った。

しばらく経ち、男の先生が教室に入ってきた。その人は、私がよく観るニュース番組のキャスターに激似していたので、少し吹きそうになった。

「今日から1年間担任を務める『川崎』と申します。よろしくねえ」

…おおう…あの、オネエですか？と思うほど馴れ馴れしい口調だった。気持ち悪い（笑）。

…まあ、これから始まる高校生活がどんな風になっていくのかが楽しみになのには変わりがない。

私は楽しみな気持ちと少し不安な気持ちを持ちながら先生の話を聞くのだった。

月曜日、私は着慣れない新しい制服を着て、初めて学校へ登校した。私は自転車で通学しているのだが、橋を3本も超えなければならぬので、少しキツイ。でも、これもだんだん慣れてくるんだろうなと思いつつ登校した。

教室に着くと、また聞き慣れない高い声が教室中に響き渡っている。私はそんな声があまり気にしないようにしながら自分の席へ向かった。

しかし、私の席は、私より背の低い女子が2，3人集まって話をしていた。

…いや、邪魔なんですけどー？

そう思いながら、私は「…ちよつとごめんね〜」とその子の目を合わさずに言いながら座ろうとした。しかし、の2，3人の女子の中の1人が、私に話しかけてきた。

「ユキちゃんだよね?!私、リノっていうんだ!よろしくね!!」

…おおふ、私こういうキャラ、正直言つて嫌いなんだよ、いや、ガチで。

私は渋々、返事をした。

「お…おおう、よろしく」

すると、その直後に、こことぞばかりに他の女子も私に自己紹介をしてきた。

「私は、カナだよ!よろしくね!!」

「私は、ミクだよ!よろしくね!!」

「私は、ユイだよ!よろしくね!!」

「私は、チカだよ!よろしくね!!」

…いや、そんな一気に言われても困るから?! しかも奇跡的に今紹介された名前、全部二文字なんだけど?! (笑) そんなことどうでもいいんだけどね?! 私、そんな一気に覚えられないし、アンタらは1回で覚えたとしても、私は顔と名前が一致せず(?!?)に2年間過(?!?)した仲間も居るくらい覚えれない頭だからね?!?! ああ、そんなの知らないか!!! (笑)

…という長文が私の頭の中で約二秒でスラスラーつと字幕の様に流れてから、私はやつと返事をした。

「…よ、よろしく…。」

…はあ、女子校つてこんなもんなのかなと思うと、なんだか不安が大きくなってきた。

まあ、これから3年間、頑張つていくしかないか。

そう思い、私は少し歪な笑顔をその女子たちに見せた。

オリエンテーション合宿

この学校では、入学して三日後に、「オリエンテーション合宿」というものがあり、隣のホテルに行き、そこで高校の校則や校歌を覚えたり、クラス全員で協力して楽しむ大縄飛び大会をするというものだ。それらを一泊二日ですて帰るといふ、つまりクラスの仲を深める行事なのだ。

私は、その日を少し楽しみにしていた。

その日は、すぐにやってきた。

当日、学校に着くと、みんなはそれぞれ仲が良くなつた友達同士で話をしていた。だが、私にはまだ仲が良い友達などいなかった。

しかし、私はこんな時に役立つ作戦があつた。

その名も、「二人でいる人に声をかける作戦」つつつ!!!

…ダサイ名前だな…（笑）

私はそう思ったが、そんな事は関係ないので早速作戦を開始した。

すると、意外にもそれはすぐに結果が出るもので。

「おはよ〜」

私は前の席に居た背の低いかわいい子に声をかけた。…かわいい子で、変態か私は。(笑)

すると、その子はぱあつと表情が明るくなり、笑顔で「おはよー!」と言ってくれた。私はクラス全員の名前をだいたい把握していたので、その子の名前が「サキ」ということが分かっていった。なので、

「サキちゃんって呼んで良い?」

と聞いた。すると、サキちゃんは

「うん! 良いよ! ユキって呼んで良いかな?」

…おおーつと! ここで私の謎の「なぜか呼び捨てで呼ばれる」という記録が更新されたあーつっ!! (笑)

小学一年生からの記録がまだ更新され続けています!!

さあ! ユキ選手、どこまで記録を更新されるのでしょうかアツツ!!!

…はあ、また私の変な癖が… (笑)

いきなり頭の中で謎の実況が始まるという… (笑)

すると、サキちゃんは不思議そうな顔をしてこちらを見ていたので、私は慌てて返事をした。

「あつ、うん！大丈夫！よろしく！」

そう言うと、サキちゃんも安心した顔で「よろしくね」と言った。

そんな会話の後しばらくすると、担任の先生が教室に入ってきた。

「今から、バスに乗るが、好きな子同士で乗って良いので譲り合って座るように。いいな？」

それを聞いたみんなは喜んでいた。

私は、ここぞとばかりにサキちゃんと隣に座ろうと誘い、即OKの返事をもらえ、私は一安心した。

そして、やっとバスに乗り、出発した。

しばらくバスに乗っていると、バスガイドのおばちゃんが、CDをかけてくれた。

そのCDに入っていた曲は今時の女子が好む曲ばかりが入っていた。

男性アイドルの曲や、洋楽や女性アーティストの曲が次々と流れていった。

私は知っている曲が何曲もあったが、だんだん眠くなり、しばらくすると爆睡してしまった。

おかげで、二回サービスイアでトイレ休憩があつたみたいだが私はそのまま起き

ず、私の感覚では三十分でホテルに着いた。実際の時間は三時間かかっていたみたいだが、私は「何のことやら？」という感じだった。

そんな私を見たサキちゃんはおもしろそうに笑っていた。私もいつしよになって笑っていた。

そのとき、私の目に一人で前の方を歩いている子が映った。髪の毛の短い、私と一番気が合いそうな子がいるのに気が付いたので。

カオル

私は前で一人で歩いている子に気づき、サキちゃんに

「ちよつとあの子寂しそうにしているから話しかけに行つて良い？」と言うと、サキちゃんはもちろんという感じに頷いてくれた。

そして私はその子に話しかけに行つた。

「やつほ〜」

と私がその子を気軽に呼んだ。

すると、その子は少し疲れた顔からぱあつと明るい顔になり、私より元気な「やつほ〜」が返ってきた。

私は、まず自己紹介をしなければならぬと思い、すぐに

「ユキといます！よろしくね！」

と言つた。すると、その子は笑顔で

「よろしく！私は「カオル」っていいます！「カオル」って呼んで良いよ！」
と言つてくれた。

私は今まで自分からなかなか話しかけない方だったため、少し緊張していたが、その返事が返ってきて嬉しくなった。

その会話が終わると、少し沈黙が続いた。

なので私は、少し焦って話題を探し出し、今日の合宿のことについて話そうと思い、口を開く。

「あのさっ」

「(???)」

なんと、同時にカオルが同じ言葉を言ったので、私は少し戸惑ったが、面白かったので笑った。カオルも笑っていた。

しばらくして笑いが治まったところで、カオルが口を開く。

「ユキはさ、今日の夜の自由時間に遊ぶ物って持って来てる？」

「うん、トランプ持って来てるよ」

「じゃあさ、あと何人か誘って一緒に遊ぼ？」

「もちろん！遊ぼ遊ぼー！」

私はその時、ちょうど私もその話をしようと思っていたので、気が合うなあ〜と思っていた。

クラスの取り組みが終わり、自由時間になっていた。

外は自然が広がっており、空気が良い。しかし、その分都会の様な光が無いので、景色は真つ暗だった。

私はカオルの居る部屋にトランプを持って行った。

すると、その行く途中の廊下でバツタリとカオルと会った。

「うお！私今からカオルの部屋行こうとしてただけど！」（笑）」

「ええっ！私もユキの部屋に行こうとしてた所だった！」（笑）」

そんな会話が誰もいない廊下に響き渡った。（笑）

しばらく経ち、カオルの部屋に5人くらい集まってトランプをしていた。

七並べをしていたのだが、私は七並べが小さい頃から好きで、勝つ事が多かった。

…だが、カオルも七並べは強く、私と接戦だった。

「あつ、ちよつとそこは出すなよ〜！」（笑）」

「へっへっへ、ラアツキイ〜〜！」（笑）」

などと、いかにも女子らしくない言葉遣いで戦っていた。

やっぱり女子校に居るとこんな風に言葉遣いが乱れて来るんだろなあと思っていたが、私は今更気づく。

(私は元々こんな言葉遣いだろーが！笑)

そう思いながらトランプをした夜だった。

しばらく経ち、消灯の時間 came そうになったのでカオルに「また明日！」と言って自分の部屋へ戻った。

すると、そこにはサキちゃんが私の布団を占領する様に大胆に寝転がっていた。

「ここは私の布団だ〜！笑」

とサキちゃんが言ったが、よく見ればサキちゃん自身の布団と私の布団を占領していたので、私は

「いや体デカ過ぎか！そんな2つも布団いるかあい！（爆笑）」

と言いながらサキちゃんが占領していた私の布団を奪う様に私も寝転がった。(笑)

そんなこんなで消灯されてからもギャアギャアとはしやぎまわり、私達は疲れてそのまま寝てしまった。

「チュンチュン…」

「…?」

私は鳥の声がして目を覚ました。すると、昨日はしやぎまわった後のままで寝ていた事もあり、布団から完全にはみ出して寝ている私とサキちゃんの姿が目に入った。

しばらく目を開けて寝転がっていたら、謎の声がした。

「おはよー、朝だよー起きてね! 今日も一日頑張ろうね! おはよー、朝だよー起きて…」
その謎の声は、幼稚園児が使う様な目覚まし時計だった。

私は笑いを堪えながらその目覚ましを止めようとしたが、サキちゃんの方が止める速さが速く、目覚ましのセリフが可哀そうなほど微妙なタイミングで止まった。

「いや、セリフ最後まで言わせてやって?! (笑)」

と、私の本音が声に出ってしまった。

するとサキちゃんはすかさず、

「いやいや、ずっとセリフ言わせててもうるさいしこの子も疲れるでしょ? (笑)」

と言った。

私はそれを聞いて、ツツコミを入れようと口を開いたが…

「この子で…ただの目覚まし…」

「それでも命は宿ってるんだ!!! (笑)」

と、謎の反撃が来た。(笑)

それを言い終わると同時に私とサキちゃんは吹き出した(笑)。

そんな会話から始まった今日は、昼になつても楽しく、ホテルを出て学校に着いた時
も楽しかった一日だった。

部活の話

オリエンテーション合宿が終わって2週間ほど経った頃である。

この学校では4月末に体育祭があり、私達はクラス対抗の競技である大縄跳びとムカデ競走を練習し始めた。

私は大縄跳びは小学校以来1度もしていなかったため、クラスの皆に迷惑をかけない様に必死に飛んでいた。

カオルは運動神経がとても良く、皆を引っ張って行っている様な存在と化していた。私はそんなカオルを見て羨ましくも思いつつ、練習に励む。

何分か練習をして、休憩時間がやってきた。

私は体力が無いので物凄く疲れていて、すぐにベンチに座り込んでいた。そこへやたらと元気なカオルがやってきた。

「よっ、頑張ってるじゃん！」

「お、おおう、カオルはこんなに運動して疲れないの？」

私がそう言うと、カオルはニコツと笑い、

「全然、これくらいなら疲れないよ」と言った。

オリエンテーション合宿が終わってからカオルと話す機会が多くなり、中学時代の話もした。

その時の話で、元々卓球部に居たという共通点が見つかり、ものすごくテンションが上がったことがあった。

だが実力的に考えても私の方が（あまり大きな声で言う事ではないが）上だった。

…それなのに体力の違いは一目瞭然、カオルの方が上なのだ。。。

そこで私はカオルに聞いてみることにした。

「何でカオルはそんなに体力があるの？」

…まあ、何故と聞いたとしても特に意味が無いことはよく分かっているのだが。

すると、こんな答えが返ってきた。

「え、だって私ソフトボール部に入りたいんだもん。」

この高校では、部活動は五月から入ることができ、今はどこの部活動に入るのかを悩んでいる時期だった。

カオルはこの話によると、ソフトボール部に入ると決めているみたいだ。

ちなみにこの高校では卓球部が無い。

私はとりあえず「そうなんだ」と返事をした。

すると、カオルが私に

「一緒にソフトボール部入ろう?」

と言ってきた。

私はすかさず、

「いや、今私こんな軽い運動で疲れてるんだよ?できるわけがないじゃん(笑)」

と言ったが、今度はカオルが

「いやいや、これから鍛えて体力を増やすんだよ!」

とキラキラした目で言われた。

しかし私は元々中学の部活を選ぶときに母に「運動部に入らないと太るよ」と言われなかったら即、美術部に入っていたであろう私だった且つ、高校では文化部に入ると決めていたため、私は「やめとく」と言った。

：しかしカオルは懲りずに次の日も、そのまた次の日もソフトボール部に勧誘してきた。。。

私もカオルに負けないくらい懲りずに拒否を続けていた。

そのうち体育祭本番の日がきた。

私達のクラスは一致団結し、二、三年生には負けたが一年生にはスポーツ科のクラス以外にはほとんど負けずに頑張ることができ、楽しい体育祭で終わった。

さすがに体育祭も終わったのでカオルの勧誘は無くなるだろうと思っていたが、未だに懲りずに勧誘してくる。

そこで私はカオルに「私、軽音楽部に入る」と言ってみた。

すると、まだそれでも勧誘すると思っていたがカオルは

「おおーそれなら良いじゃん！頑張れ！」

と言った。

私は予想外の返事に驚いたが、その勢いで私は軽音楽部に入ることにしたのだった。

元々演奏したことの無い楽器を触りたいという思いもあったためドラムを担当することにした。

カオルはというと、ソフトボール部に無事に入った様だった。

お誘い

五月末。

…梅雨の時期が近づいている。

今私達は六月最初のほうにある定期テストに向けて勉強している。

高校から「欠点」を取ってしまうと、補習に行かなければならない。

その補習は、学校が休みの日に再テストを受けなければならぬ。

私は休みの日が無くなると不機嫌になりがちなので、普段は全くしない勉強を頑張っていた。

部活動はというと、私は軽音楽部に入り、出身中学校が唯一同じの子と、その子の友達の人とバンドを組んだ。

軽音楽部は特にコレといった活動日程が無く、先輩達は近くの練習場に行ったりしていた。

元々中学校で日曜日以外常にある部活動のぎっしり詰まった予定表を毎月配られていた私にとっては、予定表も配られない自由過ぎる部活動に驚いていた。

そのため、元卓球部キャプテンとしての本領を發揮したのか、何故か私がバンドメンバーの活動予定表を作っていた。

しかし、中学時代の分刻みのメニューなどはもう疲れたので、「とりあえずこの日に練習して、練習内容は自分のパートを練習するだけで、夜7時までには帰る」という、なんと自由なメニューにした。

しかも、ちゃんとメンバーの予定は聞いているうえでだが、私が自由に予定表を作っているため、テスト一週間前は絶対に休みにしていた。私、そんなに鬼じゃないので。
(笑)

…今はそのテスト一週間前なので部活動が休みなのだ。

そんなこんなで家で勉強をしていると、突然電話がかかってきた。

それは、リュウヤだった。

リュウヤは中学の部活動の先輩だ。そして、私はその時から彼の事が好きだ。

高校に入ってから、リュウヤとは全く会っていない且つ、メールなどで話したりもしていなかった。

…そんなリュウヤから電話がかかってきたのだ。

少し緊張しながら電話に出た。

「おお！良かった！しばらく沈黙が続いたから無理かと思った！（笑）」

「あはは、すみません（笑）」

「じゃあ、今週日曜日に俺の家に来て！」

「はい！わかりました！」

「じゃあね〜」

電話を切った。

…つつしやああああ!!!

これはチャンスだああ!!

何のチャンスかって??ああ！私がリユウヤに告白するチャンスだよ!!

…なんかこんな事考えてる私が恥ずかしくなってきた。。。

まあ、とにかく今週の日曜日！よし！がんばるぞっ！

そう思いながら過ごした日曜日までの日は、後から知った話だが他の人に心配されるほど無意識に嬉しそうな顔をしていたらしい。

おじやまします

朝、目が覚めて時計を見ると、午前五時半を指していた。

普段、休みの日は昼まで一度も起きずに寝ている場合が多いのだが今日は違う。

あのリュウヤと二人で勉強会ができるという、今までで一番幸せな時間を過ごすのだ
!!

その胸の高鳴りが未だに治まらず物凄く早起きをしてしまったのだ…（笑）

とりあえず私は落ち着かせるために水を飲み、ソファーに座った。

すると、やはり早く起きすぎたため眠気が襲ってきた。

そこで、ソファーに横たわって寝ることにした。

しばらくして目を覚ますと、誰も起こしてくれなかったのか、午前11時になっていた。

約束の時間は午後1時。

…という事はあと2時間しかない！

そう思った瞬間、ものすごく緊張してきた。

リュウヤとはものすごく久しぶりに会うし、部屋に入るのもいつぶりか考えただけで

緊張してくる。

朝ごはんを食べるタイミングを逃したため、朝昼兼用の食事をとって、少しだけ気合の入った服を選び着替えた。

そして何気に携帯を見ると、この前のリュウヤからの着信履歴が目に入り、私はこれから幸せな時間が始まるのかーと思ったりしていた。

あつという間に時間は経つもので、もう約束の時間の午後1時になった。

私とリュウヤの家は意外と近く、歩いて1分かかるかかからないか位の距離のため、緊張を抑えるためにゆっくり歩いて行った。

…やはりこの距離では緊張はそこまで和らぐ事はなく、心の中で「ええい!!」と叫んだ勢いでリュウヤの家のインターホンを鳴らした。

すると10秒も経たずにドアが開いた。

「よう、久しぶり!」

私はリュウヤの久しぶりの声と顔になんだか安心した。

ちよつと大人っぽくなってる感じがあった。

私は不審と思われぬようにいつもの笑顔で「久しぶり!」と言った。

リュウヤは少し私を見るとなぜか私の方に駆け寄って来て、私の肩を弾くように叩い

た。

私はびっくりして「ひぎやあ!!」と叫んだが、リユウヤも「わああ!」と叫んだ。すると小さなクモが私の肩に乗っていた様で、私の足元にクモが落ちた。

虫の大嫌いな私はそれを見て更に「ぎやああ!」と叫んだが、リユウヤも虫が大嫌いなため「うわああ!!」と叫んだ。

私とリユウヤは急いで家に入り、ドアを閉めて一息ついた。

おかげで私の緊張はどこへやら、リユウヤと顔を見合わせて笑った。

「さつきは強く叩いてごめんな、部屋に案内するよ」

とリユウヤが言った。

私は、

「いや全然痛くなかったし大丈夫だよ!」

と言ったが、すかさずリユウヤは

「いやめっちゃ叫んでたじゃん」

と笑いながら言った。

「いやそれはびっくりしたからさ」

と私は答えるとリユウヤは

「すごい叫び方だったな、俺もだけど」

と言い、私とリュウヤはまた笑った。

リュウヤと私は、リュウヤの部屋に着いた。

私は「おじやまします」と言いながら入ると、だいぶ前に入った時より部屋がキレイになっていて、居心地が良さそうと思った。

私たちは部屋の中央にあるテーブルに向かい合って座り、勉強を始めた。

リュウヤは、

「分からない所とかあれば俺が分かる範囲で教えるよ」

と言ってくれたので、私は

「ありがとう」

と笑顔で言うのと、なぜかリュウヤは少し恥ずかしそうに「お、おう」と返事をした。

私は少し不思議に思ったが、そのまま勉強を続けた。

勉強会

私は大好きなリユウヤと勉強会をしている。

なぜ私と2人きりで勉強会をするのかは謎なのだが…。

まあ私にとってはすごくラッキーな事だから良いんだけど。

しばらく集中して勉強をしていたが、だんだん集中力が切れてきた。

私は頬杖をついて教科書をパラパラとめくって見ていた。

しばらく経って何か前に視線を感じ、顔を上げるとリユウヤとバツチリ目が合った。
すかさず私は「え？何？」と言った。

するとリユウヤは顔を赤くして視線を下に向けた。

私は、私の顔に何かいけないものが付いているのかと思い、すぐに鏡を見た。

…しかし何も付いていない。

私はだんだんリユウヤの様子がおかしい事に気がついてきた。

私はしばらく経ってからリュウヤに

「何かあった？熱でもあるの？」

と聞いた。

するとリュウヤは「いや何も…」と言ったが、それつきり言葉が無くなってしまった。私はなんだか気まぎらくなってきてしまい、なんとかりユウヤと普通に過ごせるように話題を探した。

そして私が口を開こうとした時、リュウヤが突然こちらをしつかり見た。

しかも姿勢まで正して、何か重大な発表でもあるかのような眼差した。

すかさず私も姿勢を正しくして、「なな、何でしょう？」と少し囁んでしまったが言った。

リュウヤは私の目をしつかり見て、掠れた声でこう言った。

「…この100円でジュースを買ってきてくれませんか？」

「…はい???!」

「いや、喉が乾いてしまって…」

「…え」

パシリかよ、ついにこの人私をパシリに使いやがったよ、自分で買いに行けよ…と
思った。

しかし好きな先輩にパシリに使われるのはまあ許せるかな？と思ひ、私は少し戸惑いながら近くの自動販売機でジュースを買ってきた。

リュウヤの家に戻ると、リュウヤの部屋はドアが閉まっていた。

鍵はさすがにかかかっていないため、ノックをしてから入った。

するとリュウヤがそこに居なく、その代わり私がさつきまで座っていた席に私宛の手紙が置いてあった。

その手紙を見てみると、こう書いてあった。

“好きです。付き合ってください。”

私はしばらく信じられなくて、その手紙を置いて頬をつねったり目を擦ったりしてその文字を見た。

とりあえず私は椅子に座り、その手紙を机に置き深呼吸をした。

そしてもう一度その手紙を見ると、紙の裏側にも何か文字がある事に気付いた。

それは、こう書いてあった。

“ちなみにあなたが僕を好きなのは前から知ってました、すみません。”

私はそれを見た瞬間顔が赤くなってしまい、それと同時に涙が出てきた。

これは喜びの涙なのか恥ずかしさの涙なのか分からなくなってしまった。

そしてしばらく経ってリュウヤがどこに行ったのか気になり、この家に居る事は確實

な為涙声で「リュウヤああ!!」と叫んだ。

するとリュウヤは近くにあったカーテンの後ろから出てきた。

リュウヤは私のことを終始見ていた様で、クスクスと笑いながらこちらに来た。

私は恥ずかしさのあまり、リュウヤの尻を軽く蹴つてから

「私も好きじゃああ!!」

と叫んだ。

リュウヤは笑いながら私を抱きしめた。

私はそのまま照れて動けなくなっていると、リュウヤが小声で「愛してる」と言ったため、また更に顔が赤くなってしまった。

それに気付いたリュウヤが

「おいおい、顔赤いぞ?」

と言つたため、私は恥ずかしくなつて抱きしめられた腕をサツとすり抜けて尻を蹴つた(笑)。

リュウヤは痛がりながら「なんかごめんって(笑)」と言つた。

それからしばらく雑談をしながら勉強をして1日が終わった。

私は家に帰つても今日の事が夢のように感じ、ドキドキしてしばらく寝れなかった。

恋のお悩み相談

…はあ、リュウヤと付き合うなんて夢にも思わなかったわ…

せめてこの付き合った事を高校の友達だけには言わないでおこう…

だって女子校に通ってる人が他の高校の人と付き合うなんて言ったら皆にイジられる羨ましがられて自分も嫌になってくるだろうし…

ああその面では困ったなあ…。

そう思いながら自転車に乗って学校へ向かった。

今日もいつもの様な学校の風景。

女子校独特の甲高い声の皆の騒ぎ具合。

女子校で恋愛話なんてほとんど無い。

しかし本当に恋愛話なんてすると皆からの注目度が凄い。

私は今日もいつもの様に教室に入り自分の席に着き、友達と雑談をした。

すると、向こうの方からカオルがやって来た。

しかも何か私に言いたげな顔をしてやってきた。

…まずい、付き合ったのがバレたか？

と思っっていたら、私の目の前にカオルが座った。

「…何？」

と私が言うと、何か心に決めた様にカオルは口を開いた。

「私、好きな人ができた」

「うおまじか、カオルってそんな好きな人できるキャラだったのか」

「それ酷いな？」

私の付き合った事を言われるのかと思っっていたから、別の話題だった事に凄く安心した。

…それよりもカオルに好きな人ができた事に驚いた。

気になったのでカオルの話聞くことにした。

「…で？どんな人？」

「別の高校に通ってるんだけど…」

「いやそうじゃないと先生好きになったのかと思うじゃんビビるわ」

「先生は絶対無い（笑）」

「だろうな（笑）」

それはそれで先生に失礼だと思うが。

カオルは、話を続ける。

「コウキっていう名前なんだけど、隣の共学の高校に通ってる人で…。」

「…おおうそりやあ大変だ、共学って事はその高校に女子居るじゃん」

「そう、それ。だから困ってるっていうのもあるんだけど…」

「え？それだけじゃないのか？」

「そう、もう一人、ヒロヤっていう中学の時の友達が生るんだけど、そのヒロヤがどうも私の事を好きみたいでさ…。」

「うおー！ラッキーじゃんカップルなれよー（おい）」

「いや、私ヒロヤ嫌いなんだよ」

「まじか、そりやあ大変だ」

「そう、それ。」

そんな話をしてしていると授業が始まるチャイムが鳴り、また次の休み時間にその話をする事になった。

私はいつの間にか自分の付き合った話の事よりカオルの好きな人の話で頭がいっぱいになり、胸の高まりが治まっていた。

授業が終わり、またカオルが私の席にやって来る。

「なーどうすればいいかなあ？」

「…コウキに告っちゃえば？」

「いやそう簡単に言われてもさあ、心の準備が全然出来てない」

「うーん、私だったら心の準備も無いまま告白するけどねえ…」

その言葉にカオルは何かを察した様で、私の顔を目を丸くしながら見た。

そして少し間が空いてからカオルが口を開いた。

「…え、もしかしてユキって誰かと付き合っ」

「ぎやあああその話は止めろおおお!!!」

「あああユキが誰かと付き合ってるううう!!!」

「ぎやああああ!!!」

ついに…ついにバレてしまった、油断してしまった…

というか私が叫んだのが悪いのだが。

運が良かった事に教室内は私達以上に騒がしい人が多かったため、他の人にはバレて

いないようだ。

…あくまでも予想だが。

「…絶対他の人に内緒だぞ？絶対言うなよ？」

「うーん絶対言うわ」

「やめなさい（笑）」

「大丈夫だって、私意外と口硬いから。」

「そういうこと自分で言う人って大体口ゆるいわ」

「あああひどい信頼を失った」

「いや多分違うよ、多分。(笑)」

カオルの事信じてるからね?」

「あ、はい(棒読み)」

「棒読みやめてええ」

「大丈夫大丈夫(笑)」

…という事でなんとか約束は守ってくれそうだ。

まあバレた所でどうって事も無いと思うのだが。

それよりもカオルの話の話を聞きたくなってきた。

「…で、カオルの好きな人の話は?」

「…あー、告白してくる」

「いや心の準備大丈夫か」

「まあ大丈夫でしょ」

「うおおまじか、頑張れ(笑)」

意外とすんなり話が解決したと思い、ほっとした。

しかし本当にカオルは告白するのだろうか。
なぜか私の方が緊張してきてしまった。